

こくみん共済U-12サッカーリーグ in 北海道 網走地区リーグ 2016

2016年9月4日

会 場【えんがる湧別川河川敷】

報告者【網走地区サッカー協会 TSGグループ】

1. 大会の概要

この大会は各エリア（斜網・北見・遠紋）で5月からリーグ戦を行い、各エリアで上位となった計8チームが、8月から後期トップリーグとして行っている。最終成績1、2位が道東ブロック予選へ進出、その後、北海道大会、全国大会と続く規模の大きなリーグ戦である。8人制大会で、試合時間は40分（20分ハーフ）。1人の主審と1人の補助審判によって行われている。

今回は、地区トップリーグ最終節の試合を分析させて頂いた。今シーズン、各チームで取り組んできたことの成果を知り、課題を分析する中で、次年度の各カテゴリーにおける方向性を探る参考資料として活用して頂ければ幸いである。

2. ゲームの傾向

① 『FC 網走 U12 - 美幌 UF0』

（1）分析データ

ボールポゼッションの回数（パスが4本以上連続した回数）について、1試合を通して4回（網走4・美幌0）であった。止まってボールを受け、相手に強いアプローチを受けたり、ファーストコントロールで相手から離れることができない場面が多く、パスがつながりにくい状況が多かった。

シュート数は両チーム合わせて27回（網走22・美幌5）でオンターゲット16（そのうちゴール5）、オフターゲット11となった。シュートを打つためのコントロールが良い場面が多く、また、ボールホルダーへの相手のアプローチが遅れる場面も多く、シュート数が非常に多くなっていた。



（2）成果

「前線への関わり」

FC網走の得点の多くは、前線に供給されたボールへの3人目の関わりが効果的なときであった。FWがボールを受けると、まず自分で前を向いて仕掛ける意識が高く、さらに、両サイドがタイミングよくDFラインの裏へ動き出しスルーパスを受けていた。また、FWにパスが向かっているとき（ボールの移動中）に3人目が動きだし、ワンタッチでパス交換し3人目が突破を図る攻撃があった。

また、美幌UF0は相手のディフェンスラインにできたギャップに素早くFWが走り込み、パスを受ける動きが多かった。

「ボールを奪う意識」

両チームともにボールを積極的に奪う意識は高く、しっかりアプローチしていた。ボールを奪われても、すぐに奪い返そうとする動きを実行していた。1対1の攻防は見応えのあるシーンが多かった。特にFC網走は前線からの守備を意識し、相手ゴールにできるだけ近いところでボール奪おうとしていた。

②『留辺薬ネイバーード - オニオンキッド』

(1) 分析データ

ボールポゼッションの回数（パスが4本以上連続した回数）について、1試合を通して2回（留辺薬0・オニオン2）であった。止まってボールを受け、相手に強いアプローチを受けたり、ファーストコントロールで相手から離れることができない場面が多く、パスがつながりにくい状況が多かった。

シュート数は両チーム合わせて22回（留辺薬3・オニオン19）でオンターゲット15（そのうちゴール8）、オフターゲット7となった。相手が空けたスペースにスピードをもってドリブルで入り込み、シュートを打つことが多かった。

(2) 成果

「攻守の切り替え（守備 攻撃）」

留辺薬は、奪ったボールを素早く前線の選手に配球していた。相手の守備陣形が整う前に攻撃しようとする意図が見られ、そこからのドリブルの仕掛けやサイドからの関わりもあった。

オニオンは、前線への配球が有効な場合には、スピードのあるFWにボールを配球し攻撃を仕掛けていたが、状況に応じて奪ったボールにGKが関わり、ビルドアップを試みていた。攻守の切り替えに関して、簡単に前線に蹴り込むのではなく、中盤を使って組み立てていく意図を感じた。

「ボールを奪う意識」

留辺薬は中盤でのアプローチに比較的意識は高かった。（しかし、ディフェンスラインが下がりすぎてしまい、中盤のプレッシングを活かしきれていないことが多かった。）

オニオンは、チャレンジ&カバーの距離が意識され、効果的にボールを奪える傾向が強かった。



3. 今後の課題

「攻撃における選択肢」

全体的にボールホルダーが単独でドリブル突破する場面が多かった。周りがサポートできるポジションを取り、ボールホルダーも視野の確保をしながらドリブルできれば、相手が守りにくい攻撃ができると感じた。特に、ドリブルの際、常にヘッドダウンした状態になり、目の前の相手と駆け引きすることしかできないボールの持ち方になっている場面が多かった。

「ビルドアップ」

ボールのファーストタッチで相手からはなれるようなコントロールをし、周りもそのコントロールに対応した動き出しができるようなポジションに立てれば、ボールを簡単に失わずに進んでいけると感じた。

サポートに関しては、長い距離を走る（駆け上がる）サポートは効果的にできていたが、ポゼッションが可能な、目の前の相手から離れるようなサポートが習慣化されていないと感じた。

また、GKから前線へロングボールを配球することが多かった。状況に応じて効果的な場面もあったが、オートマチックに実行しているようにも見受けられた。

「チャレンジ&カバーのポジショニング」

ファーストディフェンダーのアプローチによる相手の状況に応じて、セカンドディフェンダーがインターセプトや素早いアプローチができるようなポジションを取れないとき、相手選手に大きなスペースとプレーを選択する時間を与えてしまっていた。ファーストディフェンダーのアプローチやボールホルダーの状況に応じたセカンドディフェンダーのポジショニングの獲得を目指したい。

4. 最後に

技術委員会では、2～4種の大会・リーグ戦においてゲーム分析を行っています。冒頭でも述べたように、現状の成果と課題を捉え、次年度の指導や次のカテゴリーでの指導に生かして頂ければ、という願いがあつての取り組みです。今回のゲーム分析の内容は、該当するチームだけではなく、他チームにもあてはまる現象があるかもしれませんので、各チームで参考資料として生かして頂ければ幸いです。

最後になりますが、このTSGレポート作成にあたり協力頂いた大会及びチーム関係者の方々に感謝申し上げます、お礼のことばと致します。ありがとうございました。

【文責】本大会TSG担当：網走地区サッカー協会技術委員 工藤雅人・三澤智文

